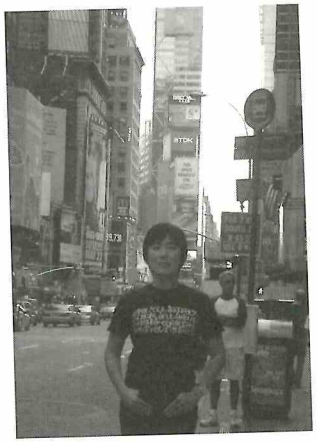
NYより

佐世保市 子ども発達センターの今後に向けて



国際連合日本政府代表部 参事官
山本　尚子

三月末になって寒かったNYの冬もようやく終わり、街に飾られたイースターの卵が春の訪れを告げています。私が縁あって佐世保市役所の保健福祉部で仕事をさせていただいたのが約九年前。発達センター立ち上げの時期、まさに卵からひよこになったばかりの頃でした。その後、平成十年に川崎先生をお迎えしたとき、平成十五年の設立五周年の記念フォーラムの際と節目に佐世保市を訪れることができ、発達センターの成長を祝い願ってきました。地域の人々が創り育ててきた発達センターはこれらの街づくり、地域社会づくりのモデルになるはず、とその記録を出版するアイデアが持ち上がったのは約二年前。私も大いに賛同したものの、何もできずにいましたが、思いを持った人々が忙しい合間に書き綴り編集し一冊の本になるとき、私もそのお仲間に入れていただけることをとても嬉しく感じています。

■街づくりの「佐世保市モデル」

私がなぜ発達センターを街づくりのモデルと考えるのか、それは第一に、発達センターが子育てをしているお父さん、お母さんの強い思いとその親たちの活動・行動がきっかけとなって設立されたから。行政にいる身として、国の補助金がつくから、県の指導があるから、隣の市もやっているから、といった理由で行われる事業などないと思いたいけれど、少なくとも発達センターは十二年前に障害を持った子どもの親たちが、子どもたちとその親にどのようなニーズがあるのかを自ら調査し、発表した当事者が、自ら立ち上がり市民に問いかけたことから始まりました。

そして第二に、設立の計画段階からその後の運営に至るまで、子育てをしている親、それを支えたい市民、医療や療育の専門家そして行政が対等なパートナーシップのもとに創り上げ、支えてきたこと。何とかしなければ、という共通の強い思いのもとに、育児や家事の合間に、診療を終えた後、また残業の後にそれぞれボランティアで集まり、何も保証されていない中で、どうしたらいいのか、自分たちの街に何が必要なのか、夜遅くまで話し合いました。

市民と行政あるいは専門家とのパートナーシップはよく言われますが、互いに相手を信頼し尊敬し合う対等な関係を築くことは必ずしも簡単ではないと思います。発達センターにおいてそれが可能だったのは、市民も専門家も行政の担当者もそれぞれの立場で子どもたちの発達を見守り、悩みながら、でも目を逸らさないでかかわってきた経験・歴史があったこと、それ故に同じテーブルについたとき、それぞれの視点をもち、途中で投げ出さず自らできることを責任もって果たすことができたのだと思います。

「そんなこと、誰にもできることではない」「私なんかとても…」と思わないで下さい。自分の住んでいる街で解決すべき問題を感じたとき、声に出し、同じ思いをもつ仲間を得て少しずつでも改善していくことは、辛いこともあるけれど、それ以上に喜びや達成感が大きいものです。

第三に、理念を打ち立て指針や計画をつくるだけでなく、同じ人間がそれを実践しその結果を評価する、あるいはしなければならない立場にあること。結果に直接責任を取る立場の人々が計画し実行していることです。これは国でも県でもなく市民に最も近い行政単位である「市」だからこそ求められることであり、できることです。私は、市町村の時代、地方分権の時代の意義はここにあると思っています。

さらに、佐世保市（あるいは地方都市といってもいいかもしれませんが）の強みは、行政官も専門家もその多くが市内に住み、仕事をし、子育てをし、生活していること、つまり皆が街を支える市民でもあること、そしてそれを自覚していることです。仕事としてかかわる者にはプロフェッショナルとしての専門性、冷静かつ公正・公平な判断が求められるのは当然ですが、発達センターとかかわる中で、それでも障害にぶつかったときに、一人ひとりの人間として地域で生きて

いることが根っことなって、それを乗り越える情熱や妥協しないエネルギーあるいは想像力を生み出し得ることを知りました。

第四に、発達センターは光武市長のリーダーシップなくしては誕生し、成長することができなかった、そしてその市長を選んだのは市民であることです。今では思い出話ですが、旧NHK放送センター施設の後利用を市役所で検討した際に、保健福祉部は発達センターの卵となった子どもたちと親を支える場としての利用を提案しましたが、市としては同様に重要な課題であった観光開発の拠点とする提案もありました。市長の前で何度も議論したことを思い出します。結果、市長が子ども発達センターの設立を決断され、その後もその政策を維持し、市民もそれを支持しています。自分たちの街をどうしたいのかを考え、それを実現する首長を直接選挙で選ぶ、市長はそれに応えるという、民主主義、選挙制度がきちんと機能しています。

リーダーがしっかりしていると、職員も安心して仕事に専念できます。役人の体質や問題点はよく指摘されますし、私もその一人ですから、身贔屓だとお叱りを受けるかもしれませんが、担当した保健福祉部の事務職員、技術職員、さらにその他の部の職員、検討段階で観光開発の拠点を主張した職員も含め、多くの職員の知恵と支えがなければ発達センターを発展させることはできなかったことを思い、職員の皆さんの努力に感謝したい気持ちです。（一緒に仕事をさせていただいている間には伝える機会がありませんでしたし、これからも「発達センターをよろしく！」との意味を込めていますので、お許し下さい。）

■これからの子ども発達センター

今の時代、大家族で生活しているか親類に囲まれている人でなければ、誰にとっても妊娠、出産、育児は未知の体験です。特に、一般的に医療機関によってフォローされている妊娠・出産に比べ、育児はもっと複雑で、感動や喜びもあるけれど不安や負担も大きい仕事です。様々なサービスが増え、昔に比べれば楽になったといわれるけれど、子育てほど精神的にも物理的にも長期間拘束されることはそうそうないと思います。育児書や情報誌を読んでも親がやるべきこと、子どもができなければならないことに関する情報が氾濫するなか、障害がある子ども、成長につまずきや困難がある子どもや、育てにくい、対応が難しいと感じている親、育児に疲れてしまった家族に対し、地域社会が温かく見守り、手を差し伸べ、適切な支援・サービスを提供することはますます重要になっています。

佐世保市の子ども発達センターが障害児に限定せずすべての子どもを対象にしていること、子育て支援センターではなくあくまで子ども自身が中心にあるべきとの考えから「子ども発達センター」とした理念は、普遍性があると思います。ただし、佐世保市とその周辺地域の〇歳から十八歳までのすべての子どもと親を発達センターだけで支えることは不可能です。発達センターを計画した際、発達センターは、①信頼できる質の高い療育サービスを提供する専門機関、②教育、保健医療関係者あるいは子育てリーダーが学び合う場、③行政サービスの拠点、④危機介入を行うセイフティ・ネット等の役割を担う、そして身近なところに「子ども広場」や「子育てサークル」等、子どもの成長を育み、子育てを見守る場があり、必要な場合に発達センターにつながる、子どもたちが多くの時間を過ごす幼稚園、保育園、学校は自らが多様な子どもの課題を解決し可能性を引き出す力を高めることが求められ、発達センターはそれを支援する、という漠然とした将来イメージを描いたことを覚えています。

佐世保市では、今でも、子育てをしているお母さんお父さんは子育てがしやすく子どもが伸び伸びと育つ地域づくりのためにスクラムを組んで働きかけているでしょうか？政治を担う人々は子ども・子育てを重要課題として位置づけ提案し続けているでしょうか？保健・医療・教育専門家は子どもとその親を取り巻く環境にも思いを巡らし診療所や学校の外でも活動しているでしょうか？行政は子ども・子育て支援について調査研究し、想像力を駆使して施策を展開しているでしょうか？子ども発達センターの職員は？そして市民スタッフ・ボランティアは？川崎先生を口説き落とし、「子ども発達センター」をこれまで引っ張ってきたのは、何より佐世保市民の力だと思います。今後とも市民が発達センターの意味を広く訴え共有しつつ、新たなサポーターやエネルギーを加え、子どもの発達と子育て支援の拠点として「子ども発達センター」を守り育てていくことを期待します。